言葉への自覚を高め、生きてはたらく言葉の力を育む授業の創造

北海道国語教育連盟研究部長　中島　大輔　（北海道教育大学附属札幌小学校）
十勝帯広大会　研究部長　杉澤　諭　（幕別町立白人小学校）
北海道国語教育連盟　副部長　後藤　卓　（札幌市立幌南小学校）
北海道国語教育連盟　副部長　鈴木　真之介　（北海道教育大学附属札幌中学校）

「不易」
本連盟で
大切に
してきたこと

Ⅰ.主題設定にあたって

研究主題設定は、「不易」と「流行」を大切にして進めていく。

設定にあたっては、以下の四点を柱とする。

（1）　過去の北海道国語教育連盟の研究の積み上げを踏まえる

（2）　新しい国語教育が目指すものを踏まえる

（3）　前年度開催地区の成果と課題を受け継ぐ

（4）　開催地区の研究の流れを大切にする

新しい国語教育の動向や方向性を常に見据えながら、昨年度の成果と課題だけでなく、継承してきた研究成果の蓄積や北の国語人としての熱意を集積し、北海道の国語教育を高める研究実践を行い、発信していく。

Ⅱ.四つの柱について

（1）過去の北海道国語教育研究大会の流れを踏まえる

北海道国語教育連盟では、これまで「学ぶ側に立った授業・指導」という考え方を大切に、「児童生徒が自ら獲得する学び」に取り組んできた。

個と集団のかかわりの中で一人一人の子どもを大切にし、その生き生きとした学び合いの姿を、授業の中で具現化するために、良質な「学習課題」に重きを置いて研究を深めてきた。

「学習課題」とは、「教材研究を通して導き出される指導目標や指導事項と子どもの学習活動を結び付けるもの」であり、以下の点に留意して設定されるものである。

- 子どもが学ぼうという意欲をもち、積極的な学習活動を生むもの
- 追究、解決のための具体的な学習活動を導き出すもの
- 追究、解決の過程を通して、指導目標や指導事項の達成、言語能力が高まるものであること
- 子どもの発達段階や特性、能力に応じたものであること

さらに、「はたらきかけ、はたらきかえされ、またはたらきかける」言語活動を通して、「発信する力・受信する力・交信する力」を高めていく実践にも取り組んできた。

これらを「不易」とし、これからの研究にも反映させる。

一方、本連盟の研究主題は、開催地区の研究の歴史と蓄積を生かし、且つ過去の研究大会の成果と課題を踏まえたものとすることを基本に設定さ

「不易」
全道各地区の
研究の歴史と
蓄積

れてきた。次に過去の研究主題を挙げる。

2010	**函館**	**「生き生きとした言語活動を通して確かな国語の力をはぐくむ授業の創造」**
2011	**釧路**	**「確かで豊かな言語活動を通して生きて働く言葉の力を育む国語授業の創造」**
2012	**十勝・帯広**	**「生きてはたらく言葉の力を高める授業の創造」**
2013	**札幌**	**「自ら言語活動に関わり学び合うことで、実生活に生きる言葉の力を獲得する授業の創造」**
2014	**空知・滝川**	**「豊かな言語活動を通して確かな国語の力を育む授業の創造」**
2015	**旭川**	**「主体的な学びを生み出す言語活動を通してひびき合う言葉の力を鍛える授業の創造」**
2016	**網走**	**「言語活動の充実を図り、実生活を豊かにする言葉の力を身に付ける授業の創造」**
2017	**釧路**	**「新たな価値を生み出す国語科授業の創造」**
2018	**函館**	**「実生活に生きてはたらく国語の力を育む授業の創造」**
2019	**札幌**	**「言語活動を通して言葉への自覚を高め、言葉の力が身に付く国語科授業の創造」**

これら連盟の研究の歴史も、「不易」として引き継いでいく。

「流行」
近年の各大会で
改善を試みている
内容を加えて

近年に目を向けると、各大会において受け継がれ、改善を試みられてきたことがある。内容を集約すると以下の通りである。

1） 児童生徒一人一人の個性の伸長と豊かな人間性の育成を目指し、学ぶ側に立つ指導・支援を明確にする。
2） 基礎・基本の定着を前提とした確かで豊かな言葉の力や、生きて働く国語の力の育成を目指す。
3） 児童生徒が主体的に言葉の力を獲得する学習のあり方を模索する。
4） 集団の中における伝え合う力を重視し、生き生きとした学び合いを生み出す学習活動を取り入れた授業の創造に取り組む。
5） 指導と評価の一体化や自己評価の力等を培う手立てを工夫改善する。

十勝・帯広大会の研究主題も、これらの改善点を踏まえつつ、新たな視点を加えて設定していく。

「流行」
国語教育の最前線に
立つ人々の声を聴く

（2） 新しい国語教育が目指すものを踏まえる

十勝・帯広大会の行われる今年度は、小学校では新学習指導要領の全面実施の年であり、中学校ではその前年となる。新しい学習指導要領のもと、今求められる授業像を示してほしいという要望は強く、そのことにこたえる大会でありたい。

2015 年 8 月に「論点整理」が示され、翌 2016 年 8 月に「審議のまとめ」、同年 12 月 21 日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の

学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が中央教育審議会から出された。そして 2017 年の 3 月に新しい学習指導要領が告示された。

連盟ではこれまで、国立教育政策研究所学力調査官・教育課程調査官の黒田諭氏、文部科学省教科調査官・国立教育政策研究所教育課程調査官の杉本直美氏、文部科学省教科調査官の菊池英慈氏、前教育課程調査官・現京都女子大学教授の水戸部修治氏を招き、講演をしていただいた。学習指導要領改訂に大きく関わる方を講師とすることで、新しい国語教育が目指すものを、いち早く研究に取り入れるようにしてきた。本大会でも、新しい国語教育について授業を通して示していきたい。

「流行」
主体的・対話的で深い学びのある国語科授業を目指して

新学習指導要領の大きな改訂のポイントは、どの教科においても生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養、の三つの柱に基づいて全ての教科の目標や内容が整理されたことである。国語科も、育成すべき資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定し、「知識及び技能」、「思考力、判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理してある。このような資質・能力を育成し、生涯にわたって生きて働くようにするための授業改善の視点として、「主体的・対話的で深い学び」が必要であることも同様に示された。

十勝・帯広大会では、この育成すべき資質・能力が児童生徒にしっかりと育まれる手立てを示す大会としたいと考えた。それは「主体的・対話的で深い学び」が生まれるような様々な手立てを発信する大会であり、国語科の授業において、児童生徒の学びが「主体的・対話的で深い学び」になるための授業の在り方について提案する大会である。

（3）前年度開催地区の成果と課題を受け継ぐ

第 74 回札幌大会では、以下のような成果と今後の研究の指標が示された。これらは十勝・帯広大会の研究主題設定にも継承されている。

「流行」
第 74 回大会の成果と課題を受けて

＜成果＞
①身近から材をとる言語活動と活動場面の具体化
②児童・生徒が自ら言葉を見つめ直すことで価値の自覚化へ
③小中の連携の推進
＜今後の指標＞
①言葉の力の評価の在り方
②研究の継続

これらの成果と指標は、十勝・帯広大会の研究主題や研究内容にも、継承・反映されるだけでなく、今後の研究大会の方向性にも生かされていく。

（4）開催地区の研究の流れを大切にする

過去の十勝・帯広大会の研究主題は以下の通りである。

「不易」
生きてはたらく
言葉の力を
全ての子どもに

年度	研究主題
1993	一人一人のよさを認め合い、生きてはたらく言葉の力を育む授業の創造
1999	一人一人の豊かな発想を生かし、生きてはたらく言葉の力を高める授業の創造
2012	生きてはたらく言葉の力を高める授業の創造

十勝・帯広地区では、「生きてはたらく言葉の力」というものを大切にしてきている。特に第 67 回十勝・帯広大会では、さらに四つの力に細分化し、明示している。

①言語活動を構成する四つの観点を活用する力
②日常生活や社会生活で必要とされる言葉の力
③課題解決の場面で主体的に発揮する力
④言語意識を高め、生かす力

さらに、それらの力を高める授業の在り方として、以下の４つの授業像を打ち出し、成果を上げている。

①言語能力を確実に身に付ける授業
②指導―活動―評価の一体化した授業
③単元の構成を工夫した授業
④言語活動を軸とした思考及び交流のある授業

これらの成果をしっかりと引き継ぎながら、近年の、十勝国語教育研究サークルや帯広市教育研究会国語部会の日々の実践研究の成果を踏まえ、研究主題を設定する。

以上のことを受けて、研究主題を以下のように設定した。

【研究主題】

言葉への自覚を高め、

生きてはたらく言葉の力を育む授業の創造

Ⅲ.研究主題解説

※十勝・帯広大会の主題解説参照

十勝・帯広大会研究主題解説

言葉への自覚を高め、生きてはたらく言葉の力を育む授業の創造

研究部長　杉澤　諭（幕別町立幕別小学校）

第 75 回北海道国語教育研究大会十勝・帯広大会は、新学習指導要領が小学校で全面実施、中学校では移行期最終年度ということもあって、非常に意義深い大会となるはずであった。「資質・能力の育成」や「主体的・対話的で深い学び」など、指導要領の重点に着目しながら、意欲的に研究に取り組んできた。また、連盟の研究部でもあり前年度開催区でもある札幌から講師の先生をお招きし、講演をいただくなど、前回大会の成果と課題を研究に反映させるよう心掛けた。さらに、これまで十勝・帯広の国語教育の中で大切にしてきた取組も研究に加味し、十勝･帯広大会らしいの研究になるよう取り組んできた。

研究主題「言葉への自覚を高め、生きてはたらく言葉の力を育む授業の創造」

子どもたちが活躍する未来社会は、現代社会では計り知れない変容・変革が予想されている。その社会をたくましく生き抜いていくためには、言葉のよさや価値を実感する学びを通して、実生活や実社会で生きてはたらく言葉の力を育むことが大切となる。そこで、授業を構想するにあたって、次の三点を重視した。

（１）「ねらいが明確な言語活動」

生きてはたらく言葉の力を育むためには、まず、子どもたちにどのような国語の資質・能力を身に付けさせるのかを、明らかにする必要がある。「どんな力を身に付けるためにどのような方法で学んでいくのか」、「身に付けた言葉の力は他教科や生活の場面でどのように役立つのか」など、単元をデザインしていくことを重視した。また、子どもたちが自らの学びを実感できるようになるためにも、単元の流れや学習のねらいを示しておくことも研究の取組とした。

（２）「言葉のもつ価値を実感する」

新学習指導要領解説では「言葉のもつ価値」について「言葉を通じて人や社会と関わり自他の存在について理解を深めること」と明記されている。つまり、言葉の価値とは、言葉の意味や働きを理解するだけでなく、他者とのつながりを通して実感させる必要があると考えた。そこで改めて「言葉のもつ価値」に気付かせられるように、言葉にこだわる取組をどの授業でも心掛けた。

（３）「言葉の力を育む授業」

言葉の力を育むために、ねらいが明確な言語活動を、反復・螺旋的に継続して指導してきた。さらに他教材や他教科の学習にも国語科で学んだことをいかすことで、確かで・豊かな言葉の力が育まれ、実生活に生きてはたらく言葉の獲得につながると考え、取り組んできた。

終わりに

本来であれば、研究授業における子どもたちの姿で十勝･帯広大会の研究を語り合いたかったところだが、昨今の情勢からそれも叶わなくなってしまった。本大会の研究については、連盟のホームページに掲載させていただく機会を得たので、機会があればぜひご覧いただきたい。

北海道国語教育連盟機関紙　第 179 号（令和２.11.16 発行）より